

「愚陀仏庵の二人」

作・渡辺かずのぶ

登場人物

夏目金之助 なつめきんのすけ 二十八歳。東京出身。松山中学校の英語教師。のちの夏目漱石。

正岡子規 まさおかしき 二十七歳。松山出身。俳人。

柳原碌堂 やなばらろくどう 二十七歳。松山出身。松山中学校の国語教師。のちの柳原極堂。

河東碧梧桐 かわとうへきこうとう 二十二歳。松山出身。俳句革新派の若手。

お重 おじゅう 二十八歳。愚陀仏庵の女中。

（舞台…愚陀仏庵一階の四畳半。畳敷きの狭い部屋に、古びた座卓がひとつ置かれている。座布団は二枚だけ。隅には行灯がひとつ、ほのかな灯りを揺らしている。上手側は台所につながり、下手側は、玄関に続いている、という設定。客席側には障子戸があり、開け放たれ、庭が見えるという設定。卓上には湯呑と急須が置かれ、茶の香りが漂う。子規はあぐらをかいて座り、金之助は湯を注いでいる。金之助、子規、木綿の浴衣や薄手の着物を着ている）

金之助

（湯呑を差し出しながら）ほら、熱いのを。道中で冷えただろう。

子規

（受け取って一口）……うん、体に染み渡るわい。東京からの船と汽車、丸一日半も揺られたけん、骨が折れたわ。

金之助

顔色が冴えん……わしが呼び出したせいで、無理をさせたかもしれんな。

子規

何を言う。お前が呼ばずとも来るわい。この庵でのんびり過ごしゃ、病も退屈も吹き飛ぶ。

金之助

……お前はいつもそう言うがな。

子規

さて、しんみりしても始まらない。お前、最近どんな句を作った？

金之助

(少し間を置き)

「虫の声 書閉じて耳す 夏の夜」

子規

なるほど。お前らしい、落ち着いた趣きがあるのう。

金之助

松山に来るのは久しぶりだろう。道中、何か面白い景色に出くわしたか？

子規

船から見た伊予灘の夕焼けがな、見事でのう。空と海の境目がわからんほど赤う染まって……あれは一句にしたい景色じゃ。

金之助

子規の眼は、病んでも鈍らんな。

子規

ほら、また病の話じゃ。景色を詠むときゃ、元氣も病氣も関係なからう。

金之助

……そうかもしれんが。

子規

金之助、時代の景色も変わってきた。汽車が走り、町に洋服の人間が増えて……わしらの俳句も、古い型におさまりきらんようになってきた。

金之助

だからこそ、句で今を切り取らねばならん……か。

子規

汽車から松山に近づいたときの景色よ。瓦屋根の向こうに（ゲホッ、ゲホッと咳き込む）、洋館の白壁が見えたんじゃ……町も変わったのう。

金之助

ほら、水を……。やはり無理をしておるんじゃないか。

子規

大げさじゃ。咳ぐらい、昔からのもんじゃ。

金之助

昔からと言つが……それが今は悪化しておるように見える。

子規

医者でもないお前が診断するな。ほら、また話が病の方へ行つとるぞ。

（奥から、盆を持ったお重が入ってくる。無地や縞模様の木綿の着物を着ている）

お重

お二人さん、お茶菓子できましたけん、どうぞ召し上がってください。今日はお饅頭ですぞ。

子規

おお、お重さん、ありがたい。これで金之助の心配も甘うなるじゃろ。

金之助

……甘い饅頭で病が治れば医者はいらんな。

お重

お饅頭は元気のもとですけん。さ、熱いうちに。

（お重が菓子を置き、軽く礼をして下がる）

子規

さて、句でもひねるか。旅の景色も町の変わりようも、題はそろつとる。

金之助

ほう、じゃあ一つ聞かせてもらおうか。

子規

（少し目を閉じて）……

「伊予の海 赤く呑み込み 日ぞ沈む」

（ゲホッ、ゲホッと咳き込み、袖で口を押さえる）

金之助

ほら、水を……。

子規

（受け取り一口飲んで）ん、どうじゃ？ さっき船から見た夕焼けを、ありのまま詠んだつもりじゃ。

金之助

情景は目に浮かぶ。だが……どこか儚さがあるな。まるで、お前が急ぐように描き切った絵のようだ。

子規

そりゃあ急がにゃいかん。夕日は待っちゃくれんけん。

金之助

体のことも、無理せず楽しみながら描くのじゃぞ。

子規

ならばなおさら、今を詠まにや損じやろう。

（行灯の灯りが揺れ、外からは虫の声が聞こえる。金之助は筆を手に取り、障子越しの夜の気配を感じる）

金之助

よし、それじゃ手前も一句ひねってみるか。

子規

おう、わしも負けんぞ。夜は長いけんの。

金之助

そうかい。それは頼もしい。じゃあ、お題は……庵の庭で夜の月明かりに照らされる朝顔にしよう。

（子規は少し微笑み、筆を動かして句帳に書きつける）

子規

朝顔か……夜の静けさに、月の光が花に当たるのが面白いのう……

（しばらく考え、ゆっくりと句をまとめる）

「月光や 朝顔の蔓 影揺れて」

金之助

ほう……月明かりに映る影の揺れを詠んだ一句じゃな。夜の庵の静けさが伝わる。

子規

ほな、金之助はどうじゃ？

（金之助は筆を滑らせ、さらさらと句帳に記す）

金之助

「夜の蔭 朝顔揺れて 虫の声」

子規

……おお、夜の息づかいと、朝顔の様子が伝わるのう。

お重

（茶を運びながら）

先生方、句会でも始められたんですか？

子規

いやいや、これは勝負じゃ。お重さんも審判をやってくれんか。

お重

ほう、それは楽しみですなあ。どちらも夜の庵の空気がよく感じられて、ええ句じゃと思いますよ。

金之助

今回はわしの勝ちじゃな

子規

また調子に乗っとるわい。

金之助

ならば、次はこれじゃ。

（筆を走らせながら）

「夏の月 庵の窓辺に 影ひとつ」

子規

おお、夜の静けさと孤独が映っとるな。わしも一句。

（少し考えて）

「蚊遣り火に 揺られて眠る 夏の夜」

金之助

情景が浮かぶ。暑い夏の夜、庵の中で静かな涼を感じるな。

子規

それにしても、蚊は多いのう。わしの体も、夜になるとむず痒うてたまらなわ。

金之助

……無理はせんようにな。

子規

心配ありがとな。わしはまだまだ大丈夫じゃ。

金之助

蚊遣り火の揺らめきは、まるで時間の流れを映しとるようだな。

子規

そうじゃの。暑さの中にも、どこか儚さがある。夏の夜は、命の短さを感じさせる時でもある。

金之助

お前はそういうものをよく見て、詠むな。わしはまだまだ未熟じゃ。

子規

未熟なんて、とんでもない。お前の句も、いつもわしの心に響いとるで。

（ゲホツ、と小さく咳をするが、すぐに笑みを戻す）

金之助

少し休んだほうがいいかもしれんな。

子規

気にせんでくれ。こんな咳ぐらい、わしの一部じゃ。

（台所からお重が戻ってくる）

お重

お茶のお代わり、お持ちしました。少しでもお身体を労わってくださいね。

金之助

お重さん、いつもありがとう。おかげで心強い。

子規

本当に助かった。ありがとな。

（お重は茶碗をそっと受け取り、頭を軽く下げると座敷の隅へ動き、台所へ続く上手に戻る）

金之助

（茶碗を手に取り、深いため息をつきながら）

このところ、世の中の空気が落ち着かんのう。戦に勝ったというのに、まるで勝ちきれぬ将棋を指しておるような気分じゃ。

子規

（眉をひそめ、少し咳き込みながら）

ああ。わしも同じ思いじゃ。確かに日本は清に勝った。条約で台湾も手に入れ、国としては大きく前へ進んだはずじゃ。しかし、その舌の根も乾かぬうちに三国干渉よ。遼東を返せと迫られて、結局は従わざるを得なんだ。

金之助

（茶碗を置き、苦々しく）

まことに情けないことじゃ。清を打ち破ったというのに、結局は欧州の列強に頭を下げる。ロシアが睨みをきかせ、ドイツやフランスまで加わっては、日本一国では抗えん。世間では「勝って負けた」とまで言われとる。

子規

浮かれてばかりはいられん、ということよ。戦に勝ったとて、世界の大国の前ではまだまだ子供扱い。日本が列強に伍するには、これから先、さらに力を蓄えねばならんのじゃ。

金之助

時代の荒波は避けられぬのう。欧米列強が虎視眈々とアジアを狙い、清国は衰え、朝鮮も揺らいでおる。日本も勝ったとはいえ、まだ盤石とは言えん。文学に生きる我らとて、この流れに背を向けることはできぬ。

子規

そうじゃ。だからこそ、俳句も変わらねばならんのじゃ。時代が動いておる。わしらの句も、旧来の型にはめられていては生き残れん。欧米の思想が押し寄せ、世の中の価値観も変わる中で、わしら日本の言葉を、命を、どう刻むかが問われとるのじゃ。

金之助

戦の勝利も、農村の困窮も、すべてはこの国の宿命。わしらは文学で応えねばなるまい。

子規

うむ。たとえ病に倒れようとも、わしは筆を置かん。松方デフシの痛みも、戦の屈辱も、この胸に刻んで句にする。未来の者たちに伝わるよう、言葉を磨き続けるまでじゃ。

（ふたり、静かに茶をすすりながら、しばし黙す。外では夏の夕暮れ、虫の声がかすかに響く）

金之助

……まあ、むずかしい話はこのくらいにしておこう。庵の外は、梅雨の合間で夜風が涼しい。肩の力を抜くにはちょうどええな。

（障子に目をやり、少し笑みを浮かべる）

ほら、庭先に蛍が飛んどるぞ。

子規

（顔を上げ、目を細めて）

……ほんまじゃ。闇に濡れた庭に、ふわりと光が揺れとる。ええ景色やのう。

（少し息をついて）

これは一句ひねらにゃならんな。

金之助

おぬしの句は、光の揺れまでも筆に乗るからな。

子規

（にやりと笑い、咳き込みながらも筆を取る）

ゲホッ、ゲホッ……ほら、こういう時こそ書くんじゃ。命が続くかどうかは神のみぞ知るが、この景色を句にせんと、梅雨も夜も通り過ぎてしまふ。

金之助

……ならば、せめて膝掛けをかける。

子規

（膝掛けを受け取り、ゆっくりとかける）

……よし。では、蛍で一句。

（行灯の灯に照らされた筆を走らせる）

子規

「闇ぬれて ひとつふたつや 蛍火の」

金之助

……ひとつふたつや、か。おぬしらしい。闇に浮かぶ光を、まるで人の息のように詠んでおる。

子規

光も命も、はかなく消える。じゃが、灯っておる間は懸命に瞬くんじゃ。

金之助

……だからこそ、心に残るのだろうか。

（庵の外から虫の声がしんと響く）

金之助

（湯呑を手に取り、静かに）

こうして夜の虫の声を聞きながら、句会のことを思い出すな。あの時の仲間たち、皆の句を並べて論じ合った日々……。

子規

うむ。句会はただの遊びではなく、我らの学び舎じゃったな。互いの句を曝し、研鑽し合う場……あれがどれほど励みになったことか。

金之助

人の句に触れることで、自分の未熟さを知る。時に叱咤激励もあったが、それが成長の糧となった。

子規

それでな、金之助……この庵で、また句会をやらんか？病があっても、筆を持ち続けるためにも。

金之助

おぬしがそう言うなら、わしも大賛成じゃ。皆を招き、句を持ち寄って論じ合う——これ以上の喜びはない。

子規

（にやりと笑い、ゲホツと咳をこらえながら）

よし、碧梧桐や碌堂にも声をかけてみる。皆の句がまた集まると思うと……わしは元氣が出るわい。

金之助

そういえば碌堂なら知っとる。同じ松山中学の国語教師でな。ただ、俳句はどんな句を詠むのかまでは知らん。

子規

碌堂はわしと同年の二十七じゃ。落ち着いた温厚な性格で、俳句には真剣で誠実。控えめじゃが仲間思いで、句会でも頼もしい存在じゃよ。

金之助

ほう、それは心強い。

子規

碧梧桐は二十二歳。熱心で真面目、新しい俳句の流れを作ろうと日々励んどる若者じゃ。誠実でひたむきな性格だ。

金之助

わしも会ってみたくなったわい。

子規

（ゲホツ、ゲホツと咳をこらえながら）

……すまん、また咳が出たわい。

金之助

あんまり無理はするな。無理して体を壊したら元も子もない。

子規

（苦笑して首を振る）

わしはもう慣れとるんじゃ。咳が出るのも、この庵の空気が変わってきた証拠かもしれない。

金之助

この庵……そうじゃな、この場所に名を付けてやってもよいのではないか？

子規

それがええ。実はもう考えておった。ここはわしらの隠れ家のような場所……

金之助

愚か者の集まる場所？

子規

そうじゃ、愚陀仏（ぐだぶつ）……世間から見れば愚か者の集まり。でも、愚かゆえに自由に詠み、語り合える場所。

金之助

なるほど、愚陀仏庵……いい名じゃな。おぬらしい、風変わりでいて深みのある名前だ。

子規

これからは、この愚陀仏庵で皆と句会をし、詠み続ける。命ある限り、ここがわしらの拠り所じゃ。

金之助

わしもここで共に詠み、共に歩もう。この庵の名に恥じぬように。

子規

——それで金之助、わしはどこの間で暮らすんじゃ？

金之助

この一階の間が子規の居所じゃ。出入りも楽じゃし、何かあった時にもすぐ駆けつけられる。

子規

なるほど。ではおぬしは二階か。上から先生風を吹かすつもりじゃな？

金之助

いやいや、単におぬしの咳の音を毎夜聞かされるのを避けたいだけよ。

子規

（ゲホゲホッと咳き込みながら笑う）

それじゃあ、ここでゆっくり養生させてもらおうかのう。

金之助

うむ。句会も大切じゃが、まずは身を養うことが肝要じゃ。おぬしが筆を持ち続けられるように、この庵ごと支えよう。

子規

すまん、ちょっと便所に行きとうなった。

金之助

わかった。案内してやる。初めてじゃろうから迷わんようにな。

（金之助が立ち上がり、ゆっくりと子規の腕を取りながら歩き出す）

子規

ありがとう、金之助。こうしておぬしに世話になりながらの生活じゃのう。

金之助

わしもおぬしが元気であるのが何よりじゃ。

（二人はゆっくりと庵の奥へと歩いて行き、舞台からはける）

（午後の風下がり。下手から河東碧梧桐と柳原碌堂が下手から入ってくる。二人とも薄手の木綿の着物を着ている。お重が先導しながら）

お重

こちらへどうぞ。お二人とも、お疲れでしょうから、ゆっくり休んでくださいね。

碧梧桐

ありがとうございます、お重さん。ほんまに助かります。

碌堂

はい、よろしゅうお願いいたします。

お重

ここが愚陀仏庵の居間でございます。みんなのお越し、待ったんですよ。

碧梧桐

落ち着いた、ええお部屋じゃなあ。こんな場所で句を詠み交わせるなんて、ほんまにありがたいことですね。

碌堂

静かで心休まる空間……創作にはぴったりじゃわい。

お重

そう言われると嬉しいです。先生方に少しでも快適に過ごしてもらわにゃあ。

碧梧桐

子規先生のおかげで、またみんなで集まれるんは、ほんまにありがたいことですよけん。

碌堂

彼の俳句への情熱は、わしたちにも大きな励みになっとるんよ。

お重

ほんなら、お二人さん、ゆっくり休んどってくださいね。

（お重はそっと部屋を出て行く）

碧梧桐

この庵で詠む句は、また格別になるんでしょなあ。

碌堂

そうじゃな。新しい句会が待ち遠しいわい。

（金之助が上手から居間にきて、碧梧桐と碌堂と向かい合う）

金之助

碌堂さん、こちらでもお会いできるとは心強いすな。

碌堂

夏目先生、ええ、仕事場とはまた違う顔ぶれで句を交わせるのは、嬉しいものです。

碧梧桐

わたしは河東碧梧桐と申します。子規先生のもとで俳句を学ばせてもらうてます。どうぞよろしゅうお願いいたします。

金之助

皆の句を拝見し、少しでも学ばせていただければと思います。子規が多くの縁を繋いでくれて、本当にありがたいことです。

碧梧桐

まだまだ未熟じゃけんど、こうして皆さまと集うて句を交わせるんは楽しみでなりません。

碌堂

同じくでございます。これからどうぞよろしくお願いいたします。

金之助

こちらこそ。子規の病状が心配ではありますが、こうして皆で励まし合えるのは何よりの慰めです。

（ガラガラと玄関の扉が開く音がして、子規がゆっくり下手から戻ってくる。手には小さな籠に入ったイチジクを持っている）

子規

ただいま戻ったぞ。みんなで食べるように、道すがらイチジクを摘んできたんじゃ。まだ若い実もあるが、味は悪うないはずじゃ。

碧梧桐

おお、それはありがたいですわ。子規先生のお心遣いに、ほんま感謝いたします。

碌堂

この庵で食べるイチジクは、きっと格別じゃろうな。

金之助

……無理はせんほうがええぞ。おぬしの体には、まだまだ労わりが必要じゃ。

子規

心配かけて悪いのう。でもな、このくらいのことでは弱音は吐けん。元気でおらにゃ。

金之助

わかっとるが、いつもそう言うて、結局無理をしする。

子規

お前の言う通りかもしれん……だが、今は詠むことがわしの生きがいじゃ。イチジクの甘さも、詩に変えてやるけんう。

碧梧桐

句を詠むことで、気持ちもしゃんと強くなるんですわ。どうかお大事にしてください。

碌堂

みんなで支え合って、ええ句を紡いでいこうや。

子規

(うなずき、籠のイチジクを皆に差し出す)

さあ、みんなで食べて力をつけようや。

碧梧桐

(口に運びながら)

ほんに甘いですねえ。松山の夏は暑いけど、果物の味も濃うて、恵まれとる感じがしますわ。

碌堂

ほんまじゃな。松山の夏は暑いけど、こうして庵の中で涼めるんはありがたいわい。

金之助

都会にはない落ち着きがある。私もこつという静かな場所で句を紡ぎたいものだ。

子規

(咳をひとつして笑いながら)

都会の喧騒は疲れるけんう。わしはこでゆっくり詠む方が性に合うわ。

碧梧桐

そうですね。松山の空気は澄んどるし、風もやわらかい。ここで俳句を学べるんは、ほんま幸せなことですわ。

碌堂

句会の話もしにゃいけんけど、こうした何気ない話もええもんじゃな。

金之助

人が集まって語らうこと自体が、また新しい句の糧になる。

子規

そうじゃ。わしらの俳句は、日々の暮らしや季節の移ろいを映す鏡じゃけん。

碧梧桐

この庵で紡がれる句が、未来に残ることを願いますわ。

碌堂

わしもそう思う。子規さんの元気なうちは、またみんなで句を詠み交わせるけん。

子規

もうすぐ梅雨も明けるところじゃな。紫陽花の青も、雨に映えてきれいじゃった。

碧梧桐

ほんにそうですね。梅雨の終わりの紫陽花は、どこか物悲しゅうて……：それがまた風情を感じさせますけん。

碌堂

（団扇でそっと風を送りながら）

昨日の夕立もすごかったのう。夕立の後の空の青さは、夏本番を告げる合図じゃ。

金之助

夕立の音も、時には俳句のよい題材になるな。自然の儚さや急変を思わせられる。

子規

そうじゃな。夜には蛭も飛び始める頃じゃ。あの光はまるで、夏の夜の宝石のようじゃ。

碧梧桐

蛭は詠み甲斐がありますねえ。闇に光る小さな命、その儚さをどう詠むか……：そこが腕の見せ所やと思いますわ。

碌堂

朝顔も咲き始めたし、夏の朝は一層暑さを感じるが、涼やかな花を見ると心が和むわい。

金之助

夏の季語は力強さの中に繊細さもある。そんな複雑な心情を俳句で表せればと思う。

子規

そうじゃ。俳句は季節の移ろいを映す鏡。今の季節の風物を詠むことで、わたしの時代を未来に伝えたいんじゃ。

（四人は互いに微笑み合い、句会の準備を進める）

（急にゲホッ、ゲホッと咳き込み、袖で口を押さえる）

金之助

おい、また咳がひどくなってきたな……

子規

わたしの咳は昔からの付き合いじゃ。慣れとるけん、心配せんでくれ。

碧梧桐

でも……その咳を見ると、やっぱり心配になります。病の具合は、まだ落ち着いてらんですか？

碌堂

子規さんの体調は繊細じゃ。時折こうして咳き込むことがあるが、無理は禁物じゃ。

金之助

今のままじゃ、暑さも堪えるし、養生が必要じゃ。わしらもできる限り支えるつもりじゃがな。

子規

みんなに心配かけて悪い……だが、わたしはまだ句を詠み続けたいんじゃ。命ある限り、俳句に命をかけるつもりじゃけん。

碧梧桐

……そうですか。そこまでの覚悟なら、わしらも心を決めにやなりませんなあ。

碌堂

皆で支え合いながら、良い句を紡いでいこうや。

子規

ありがとう、みんな。こうして皆と過ごす時間が、何よりの薬じゃ。

（少し笑みを浮かべて）

ほじゃ、にこやかに句会を始めようや。

碌堂

（筆を取りながら）

わしも心して詠ませてもらう。久しぶりじゃけん、少し緊張するがのう。

金之助

わしも未熟ながら、皆さんの句から学ばせてもらうつもりじゃ。どうぞよろしく頼む。

子規

（咳き込みながらも元気に）

では、最初はわしから始めるぞ。皆、耳を傾けてくれ……

「夏の日に ひとり映せし 川の面」

……どうじゃろうか。

碧梧桐

明るい句ですなあ。真夏の日差しと、水面に反射する光が目には浮かぶようですわ。

碌堂

夏の暑さの中にも、どこか涼を呼ぶ一句じゃな。川の流れも感じられる。

金之助

私も続けさせてもらおう。

「蝉しぐれ 午後の庭先 影を濃く」

……どうかのう？

子規

蝉の声に照りつける日の光……午後の暑さと、その影の濃さがよう出とる。

碧梧桐

夏の盛りがそのまま詠み込まれとります。静けさよりも、生き生きとした熱気がよう伝わってきますわ。

碌堂

わしも詠むぞ。

「打ち水や 石畳から 風ひとつ」

……どや？

子規

水の涼やかさと風の気配がうまく重なっておる。夏の午後の心地よさが見えてくる句じゃな。

金之助

皆の句を聞いて、ますます学びたくなる。もっと精進せねば。

子規

（咳き込みながら）

無理せんようにな。ゆっくり楽しもうや。俳句は心の声じゃけんの。

金之助

では、わしからもう一句。

「夏の雲 陽を焦がしつつ 影濃し」

子規

おお、迫力があるのう。真夏の午後の光景が目には浮かぶわい。

碧梧桐

そうですね。雲の大きさと、地上の影とが対照的で、とても印象的ですわ。

碌堂

わしも一句。

「庵の風 午後の静けさ 昼寝かな」……暑さの中に、ふと訪れる涼しさじゃな。

子規

（軽く咳をして）

ほう、風の通る午後の静けさが詠まれておる。わしも負けておれんのう。

「青葉風 ふと頬なでる 昼の夢」

金之助

みんなの句には、それぞれ夏の風景と情緒が溢れておる。こうして語り合いながら詠むのは、わしにとっても貴重な時間じゃ。

碧梧桐

句会はただの集まりやなく、互いの心を映し合う場やと思いますわ。子規先生のご病状は気になりますけれど、今日のように詠むことで、力を得ておられるように見えますなあ。

碌堂

心が元気ならば体も支えられるはずじゃ。無理せず、ゆっくりやろうや。

子規

（軽く咳をして）

皆の言葉、胸にしみるわい。わしも無理はせんが、詠むことをやめる気はない。これからも一緒に、夏の風を感じながら詠もうや。

碧梧桐

ほんなら、少し外の空気を吸いに行きましようか。暑さも落ち着いた頃でしょう。

碌堂

うむ、庭を散歩しながら昼下がりの風を感じるのもよからう。

金之助

わしも付き合おう。子規、おぬしはゆっくりしとれ。

（碧梧桐・碌堂・金之助が舞台下手に去る）

子規

（独り残り、肩を少し震わせ、咳き込みながら）

……ゲホッ……ふう……

（手のひらを見る。少し赤く染まった血をじっと睨む）

（蝉の声が遠くて響き、ゆっくり暗転）

（舞台が明るくなる。朝の愚陀仏庵。障子の外から蝉の鳴き声が響く）

子規

（几帳面に筆を動かしながら）

朝から蝉がやかましいのう。筆が追いつかんわ。

金之助

（湯を注ぎながら苦笑）

蝉の声など、俳句の格好の題材じゃ。おぬしなら一句で黙らせられるはずよ。

子規

（小さく咳き込みながら、にやりと笑う）

黙らせるんやのうて、共に鳴かすんじゃ。命短いもん同士な。

（ふたり、机を挟んで筆を取る。遠くで鐘の音が鳴る）

子規

（筆を置き、ふっと息を吐いて）

……しかしまあ、俳句ばかりやっていると、さすがにあきあきしてくるのう。

金之助

ほう、それをおぬしが言うか。俳句の申し子が音を上げるとは。

子規

いや、句を捨てるいうんじゃない。ただ、気分転換に別のもんも書いてみとうなっただけよ。紀行文でも、随筆でも。

金之助

悪くないのう。おぬしの目で見た松山の景色は、句よりも雄弁に人の胸を打つやもしれん。

子規

ほほう、夏目先生に褒められるとは珍しい。こりゃ余計に書かにならんな。

（外からお重の声）

お重

ご飯の支度ができましたよ。どうぞ召し上がってくださいませ。

子規

養生も兼ねて、まずは飯じゃの。

金之助

うむ。句より先に腹を満たすとしよう。

（お重が上手から出てきて、麦飯、味噌汁、漬物。膳を整えている）

お重

さあ、お二人さん。熱いうちに召し上がってくださいな。

子規

（箸を手に取りながら）

うむ、うむ。庵で食う飯が一番旨いわ。

金之助

ほう、それは褒め言葉か、それともただの食い意地かの。

子規

どっちもよ。俳句よりはるかに確かな楽しみじゃ。

お重

（呆れたように笑って）

先生方、句も飯もほどほどが一番でございますよ。

（子規、ゲホゲホッと咳き込み、箸を止める。お重がすぐに湯呑を差し出す）

子規

かたじけない。……こうして支えられてばかりじゃのう。

金之助

人は支え合うものじゃ。おぬしも、わしらを支えとる。

子規

……朝も昼も夜も、鳴きっぱなしじゃな。あやつらも必死なんじゃろう。

金之助

（飯を口に運びつつ、ちらりと子規を見る）

また弱気なことを。昨日まで共に鳴くなどと言っておったではないか。

子規

弱気やのうて、写生よ。耳にしたままを言うただけじゃ。

お重

それなら、しっかり召し上がってくださいな。お体が資本でございます。

子規

（小さく頷いて）

うむ。腹を満たせば筆も走る。まだまだ詠まにゃならんことがあるけん。

（場の空気が和らぎ、三人がそれぞれ膳に向かう）

（朝餉を終え、三人が少し片付けを済ませる。外の蝉の声が絶えず響く）

（玄関の戸がそっと開く音。柳原碌堂と河東碧梧桐が下手ら顔を出す）

碌堂

おはようございます。お邪魔しますのう。

碧梧桐

いやあ、今日は蝉の声がすごくて……道中、耳がやかましいくらいやったです

わ。

子規

おう、よう来てくれたのう。座れ、座れ。

金之助

おぬしら、暑さには負けんのう。

お重

（上手から出て、茶碗を手に）

先生方、冷たいお茶も用意しましたよ。暑さに負けずにどうぞ。

碧梧桐

（お茶を受け取り、子規に目を向け）

子規先生、どうかご無理なさらないといてくださいや。昨晚の句会でも、少しお疲れの様子じゃったけん。

金之助

……無理はせんようにな。

子規

（にやりと笑い、軽く咳をしながら頷く）

おぬしもな、金之助。……今日は俳句はなしじゃなし。

碌堂

ほう、それは珍しい。句を忘れて、何をするおつもりですか？

碧梧桐

それは意外ですなあ。散歩でもなさるんか、それとも庵でお喋りですか。

金之助

わしも賛成じゃ。今日ぐらいは筆を置いて、愚陀仏庵の空気でも楽しむとしよう。

子規

（微笑みながら窓の外を見つめ）

うむ。蝉の声でも聞きながら、雑談でもするかろう。書き物ばかりでは疲れるしの。

お重

（立ち上がり、膳を片付けながら）

先生方、朝餉はこれでお下げしますね。お茶碗やお椀も拭いて片付けますので、ゆっくりしてください。

子規

おぬしは本当に手際がええのう。ありがとな。

金之助

お重さん、いつも助かる。おかげでわしらも安心して過ごせるわ。

お重

何をおっしゃいますか。先生方のことですから、元気でおられんことにはわたくしも落ち着きません。

（お重、上手に去る）

子規

うむ、今日も無事に一日が始まったのう。

しかし暑いのを。松山の夏は、筆より汗の方が先に出るわ。

金之助

（苦笑しつつ扇子を取り出す）

確かにのう。わしも二階でじっとしておるだけで汗だくだ。そろそろ簾を降ろすかの。

お重

（上手から、手を拭きつつ口を挟む）

先生方、簾を降ろしても風通しを忘れずになさってくださいね。蒸し風呂になりますから。

子規

（小さく咳をしながら、にやりと笑う）

お重さんは相変わらず抜け目ないのう。さすがじゃ。

金之助

わしは抜け目ないというより、ただの暑がりじゃ。お重さんの目にはかなわんわ。

子規

（軽く咳をしつつ）

ほう、金之助も案外弱点があるのう。筆だけが強いと思っとった。

金之助

いやいや、筆の強さはわしの唯一の取り柄じゃ。あとはおぬしと同じで、夏には弱い。

お重

まあまあ、お二人とも。仲良く話してくださいな。夏の陽気は二人の口論も熱くしますから。

子規

……あの山の緑も、夏の光でまぶしいのう。こうして静かに見られるだけで幸せじゃ。

金之助

うむ。文学も句も大事じゃが、こうした日常の一瞬こそ、心に残るもんじゃな。

（お重が上手に去り、蟬の声と庵の静かな音だけが残る）

碌堂

ところで、子規先生。最近の俳句や詩の評判について、東京ではどう言われとるのですかのう。

子規

（少し咳をこらえつつ、顔を上げる）

東京か……評判か。まあ、わしらのやり方はまだまだ理解されんのう。俳句も短歌も、従来の流派からは異端扱いじゃ。

金之助

おぬしの言う通りじゃ。革新と保守の間で、議論は尽きんのう。東京の新聞や雑誌でも、論争が盛んじゃ。

碧梧桐

やっぱり、東京では議論が盛なんですねえ。松山では実感は薄いけど、こうして四人で話しても熱が入るんは当然かもしれませんわ。

碌堂

わしらが庵で静かにしておる間にも、都会では言葉の戦があるわけですよ。

子規

（小さく咳き込み、笑みを浮かべる）

それでも、こうして庵で皆と話す時間は貴重じゃ。批評や論争は後でやればええ。

金之助

うむ。日常と論争を両立させるのが、我々の道じゃな。

碌堂

せっかくじゃ。東京では新旧の流派がぶつかっとるそうじゃが、子規先生の俳句や短歌は、わしら庵の者から見ても革新的ですよ。

子規

（軽く咳をしながら筆を手取る）

革新的……かのう。わしとしては、ただ真に感じたことを写したいだけなんじゃがの。

金之助

しかしその“真に感じたこと”が、従来の文壇では理解されん。それゆえ論争が起きるのじゃ。

碧梧桐

なるほど……形式や慣習よりも、心から出た内容を大事にする。けど、それを正しく評価してくれる人もおるんですよ？

子規

おるおる。わしのやり方を理解してくれる仲間がおるから、こうして書き続けられるのじゃ。

碌堂

子規先生の俳句や短歌は、従来の定型に囚われぬところが魅力ですのう。しかし、古い流派からは形式を乱すと批判されるのも事実ですな。

子規

形式は大事じゃ。しかし、写生の精神を忘れて型に固執するのは、わたしには耐えられん。言葉は命と同じじゃ、縛られて死んでもうたら意味がない。

金之助

わたしも賛成じゃ。文章も俳句も、心の動きが第一じゃ。形式は手段に過ぎぬ。しかし、古い流派も長年培った技術を否定するわけにはいかん。

碧梧桐

自由と技術、両方が大事なんですなあ。わたしは伝統を守りながら、新しい表現を加える道もあると思うんですけど……子規先生はどうお考えですか。

子規

混ぜるのは構わんが、わたしは自分の目で見たことを、自分の言葉で書きたいんじゃない。

碌堂

なるほど。ありのままを詠む、その姿勢こそ俳句の新しい道じゃのう。

碧梧桐

こうして議論を交わすことも、頭の鍛錬になりますなあ。しかも夏の光を浴びながら話すと、気持ちも明るくなりますわ。

金之助

孤独に書くのも大事じゃが、こうして互いに考えを交わすのは、文章にも生きる。議論は創作の肥やしじゃな。

子規

おぬしらと語らうと、自分の考えも整理される気がするのう。批判も励みになる。

碌堂

議論が続くと、時には意見がぶつかることもありますのう。しかし、それもまた楽しみの一部ですな。

碧梧桐

伝統を守るか、新しさを求めるか——その境目を見極めるんが一番むずかしいと感じますわ。守りすぎれば窮屈になるし、攻めすぎれば土台を失う。

碌堂

（静かに頷き）

確かに。古きを尊ぶ心がなければ、革新も根なし草になる。しかし、型ばかり重んじては、新しい芽が摘まれてしまいますのう。

金之助

（扇子を手に、少し笑みを浮かべて）

学問も同じじゃな。西洋の学説をそのまま持ってくればいいというものではない。日本の土壌に合うように消化せねばならん。文学もまたしかりじゃ。

子規

（軽く咳をしてから、真剣に）

わしは“守るために変える”という考え方が好きじゃ。古い型を壊すことも、結局は本当の価値を守るためなんじゃ。写実もその一つじゃな。

碧梧桐

“守るために変える”……深いすなあ。じゃあ、どこまでが守るべきもので、どこからが壊してよいもんなんでしょうか。

子規

それを決めるのは、結局“心”じゃ。形式に縛られずとも、心の底から生まれた言葉なら、それは伝統の火を継いどると、わしは信じとる。

碌堂

なるほど。つまり革新も、伝統の大河の流れの中にあるということすな。

金之助

そうじゃ。川の流れをせき止めるのも、荒れ狂わせるのも愚か。大事なのは、流れが絶えぬように導くことじゃ。

碧梧桐

そう考えると、伝統と革新は敵同士やなく、ひとつなかりに思えてきますわ。そう思うと、ちいと気が楽になりますなあ。

子規

（小さく咳をしながら）

わしらがどれだけ自由に書こうとも、古い流派や保守的な文壇は黙っておらん。批判は必ず出るのう。

碌堂

実際、東京では批判の声も強いですのう。型破りな作風は、すぐに論争の種になる。

金之助

批判を恐れて表現を抑えることは、作家として死を選ぶようなものじゃ。受け止めるべきは受け止め、流せるものは流す。それが生き残る術じゃな。

碧梧桐

批判は、ときに自分の言葉を映す鏡にもなりますわ。どこまで伝わっとるのか

を知る機会にもなりますし。

子規

（にやりと笑い、少し咳をして）

そうじゃのう。わしは批判も楽しむ方じゃ。心ある批判なら、自分の視点を磨くチャンスになる。むしろありがたいくらいじゃ。

碌堂

（微笑みつつ）

わしも、庵で皆と語らうことで鍛えられる。批判に耐える力も、この仲間との日常で育つのですのう。

金之助

一人で考えを深めるのも大事じゃが、仲間と議論を重ねることで揺るがぬ土台ができる。創作は結局、人との交わりの中で育つものじゃな。

碧梧桐

結局のところ、伝統も革新も、批判も賛辞も、すべては自分の心と向き合うための材料やと思いますわ。

子規

うむ。庵におるだけで、書き手として、そして人としても学べる。ありがたい場所じゃのう。

（急に胸を押さえてゴホッ、ゴホッと咳き込み、顔をしかめる）

……すまん、少し熱うなりすぎたようじゃ。

金之助

（すぐに身を乗り出し、子規の背に手を添えて）

議論はまた明日でもよい。今は休むのじゃ。

碧梧桐

（心配そうに）

子規先生、大丈夫ですか？ 水を持ってきましょか。

碌堂

（落ち着いた声で）

わしが取ってこよう。少し冷ました水がええ。

（碌堂が立ち上がり、上手へ向かう。庵の中には、蝉の声と子規のかすかな息だけが響く）

子規

（呼吸を整えつつ、苦笑して）

……すまんの。わしは病にあってても、つい言葉に熱を込めてしまう。これが性分じゃろうな。

金之助

性分もよいが、命を削ってまで語るでない。おぬしの言葉は、この先もきっと広がってゆく。

子規

（目を細め、少しだけ声を和らげて）

……そうか。なら安心じゃ。わしの言葉も、これから先に生きてゆくんじやな。

（碌堂が水を持って戻り、子規に差し出す）

子規

ふう……まあ、この咳もわしの句作りの合いの手じゃ。ほら、蝉の声と交互に響いておる。

碧梧桐

（思わず吹き出して）

なるほど、蝉との二重唱ですかい。夏らしいすなあ。

碌堂

（苦笑しながら首を振り）

先生、冗談を言えるうちは大丈夫そうですな。

金之助

まったく、おぬしはいつもそうやって人を心配させては笑いに変わる。困った病人じゃ。

子規

病人は病人らしく寝ておればええのか？ それでは庵が退屈でならん。わしは咳き込みながらも騒がしく生きていたいんじや。

碧梧桐

その気迫があるけんこそ、新しい文学も切り拓けるんやと思いますわ。

碌堂

病もまた力に変える……子規先生らしい考え方ですのう。

子規

（軽く胸を叩きながら、笑顔で）

まあ、咳も拍子木と思えば賑やかなもんじや。庵の囃子方を務めるつもりでおるわ。

碧梧桐

ははは、庵に囃子方とはおもしろいですなあ。じゃあ、碌堂先生は太鼓役でしょうか。

碌堂

太鼓？ わしはせいぜい木魚くらいが関の山ですわい。

金之助

ほう、では碧梧桐は笛じゃな。音は大きいが時折調子外れになるところがそっくりじゃ。

碧梧桐

そ、それは失礼ですわ！……いや、まあ確かに熱うなりすぎることはあるかもしれませんがどなあ。

子規

（咳をこらえつつ笑いながら）

おぬしら、わしを笑わせてどうする。咳き込み役はすでにおるんじゃからな。

（全員がどっと笑い、庵に笑声が響く）

碌堂

こうして笑っておると、暑さも病も忘れますのう。

金之助

まったく。議論ばかりでは窮屈になるが、こうして馬鹿話をしていると、庵もますます心地よくなる。

碧梧桐

（扇子をひらひらさせながら）

庵の夏は、やっぱりこうでなくちゃですなあ。

子規

（目を細め、穏やかに頷きながら）

うむ。病も暑さも、こうして笑い飛ばしてしまえばええ。

碧梧桐

——あっ、夏目先生が松山で暑さに負けて寝込む姿を想像したら……句にならんくらい可笑しいですわ！

金之助

（苦笑しつつ扇子で碧梧桐を軽くあおぐ）

何を言うか。わしは暑さには強いんじゃ。ただ扇子が手放せんだけだな。

子規

ははは、それを弱いと言っんじゃ、金之助！

（言葉の途中でふいに咳き込み、体を少し丸める）

碌堂

（慌てて身を乗り出す）

子規先生、大丈夫ですか？

子規

（手で制しながら、笑顔を作って）

ただの咳じゃ、心配無用……ゲホッ、ゲホッ！

（だが咳が止まらず、畳に膝をつき、口元から赤い血が滴り落ちる）

（場が一瞬で凍りつく。蝉の声だけが外から響く）

金之助

子規！

碧梧桐

血が……出とる……！

碌堂

こんなに急に……

子規

（弱々しくも、にやりと笑みを浮かべて）

……すまんのう、笑いすぎたわ……

（お重が上手から飛び出して駆け寄る。庵の中は静まり返り、子規の荒い息と蝉の声だけが重なって響く）

金之助

（急いで子規のそばに駆け寄る）

子規！　しっかりせんか！

子規

……大したことはない。心配かけてすまん……ゲホッ、ゲホッ

碌堂

（心配そうに額に手をやり、子規の肩を支える）

先生、無理をなさらぬように。

碧梧桐

（ハンカチを差し出しながら）

子規先生、少し休んでください。今日の論争なんぞ後でもできますけん。

子規

（微かに笑い、咳をこらえながら）

論争より、まずは息を整えるんじゃない……わしも、無理をしすぎたかのう。

金之助

（真剣な目で、子規の額に手をやる）

こうして四人で論じる時間も大事じゃが、体が資本じゃ。

（舞台がゆっくり暗転する）

（愚陀仏庵の居間。夕方の光が差し込み、蝉の声が遠くに響いている。金之助と子規が向かい合って座っている。）

金之助

（湯呑を差し出しながら、穏やかにしかし心配が滲む声で）

ほら、熱いのを。外は涼しくなってきたが、どうか無理はせんでくれ。

子規

（微笑みながら湯呑を受け取り）

ありがとう、金之助。まだまだわしは元気じゃ。そんなに気にせんでええ。

金之助

咳が長う続いとるな……。正直、初めておまえの喀血を見て、胸が締め付けられる思いじゃ。

子規

ああ、それくらいは誰にでもあるじゃろう。わしはまだ詠みたい句があるけん、負けておれん。

金之助

わかっとる。だが、わしが見守るうちは、無理だけは禁物じゃ。病はどうにもならんこともあるが、できる限り守りたいと思う。

子規

金之助……おまえは、こわくないんか？ わしの病が結核じゃと知って――。

金之助

わしには移らん。理屈じゃ。おまえの病は伝染するかもしれんが、わしがかかるとはならない。

（玄関の戸が開く音がして、下手から碌堂と碧梧桐が入ってくる）

碌堂

おお、久しぶりじゃな。今日はお邪魔するぞ。

碧梧桐

久しぶりの句会、楽しみにしました。……子規さん、お体の具合はいかがですか？ 無理されてませんかいな。

碌堂

ほんまよ。顔色が少し青いように見えるが、大丈夫かのう？

子規

氣遣ってくれてありがたい。正直、痛みは続いておるし顔色も冴えんじゃろう。じゃが、こうして皆と句を交わせば心が軽くなる。それが何よりの薬じゃ。

金之助

気分転換になるとええな。句会は心の薬じゃ。

碌堂

さあ、始めるか。今日の一句はどんなテーマにする？

碧梧桐

季節は盛夏ですなあ。暑さといっしょに移ろう自然を、よう詠んでみたいで

わ。

碌堂

それなら、わしから一句詠むぞ。

「蝉しぐれ 声に沈みて 夏の夕」

碧梧桐

ああ、夏の夕方の熱気と静けさが一緒に浮かんできよりますわ。蝉の声が、暑さをいっそう感じさせますなあ。

子規

わしも一句。

「草の戸に 涼しき風の 音ぞする」

夕方に吹く涼しい風の音が聞こえるようじゃ。夏の暮れゆく景が目には浮かぶ。

金之助

自然の声を切り取るのが俳句の妙じゃ。皆それぞれの感性が現れて面白いのう。

碌堂

碧梧桐、おまえも一句頼むぞ。

碧梧桐

「蝉時雨 木陰涼しく 声ひびく」

……夏の夕方の喧騒の中でも、涼を求める気持ちを含めましたわ。

子規

おお、それは良い。蝉の声もこんなふうに詠むとまた味わい深い。

金之助

（少し笑みを浮かべて）

わしも一句。

「夏の夕 蝉声やまず 影のびる」

暮れかける光の中で、蝉の声だけがしつこく響いておる光景が、昔から好きだな。

碌堂

うむ、夕暮れの影と蝉の声が響き合う。静けさの中に時の流れが見える句じや。

子規

金之助らしい写生よの。目にした景をそのまま切り取る力がある。

碧梧桐

皆で句を重ねると、夏の夕方の景色がますます鮮やかに浮かんできよりますなあ。

子規

まだまだ勉強不足じゃ。皆のおかげで励みになる。

碧梧桐

今日はこうして皆さんと詠み合えるのが、本当に嬉しゅうございますわ。

金之助

この時間が、わしらにとっても心の支えじゃ。

子規

まだまだ詠みたい句がある。命が続く限り、言葉を紡ぎたい。

金之助

わしもおまえの言葉が未来に届くよう願っておる。

碌堂

じゃが、無理はせんようにな。体が資本じゃ。

碧梧桐

はい。体を大事にしながら、心は自由に詠んでいきたいですわ。

子規

その通りじゃ。皆の言葉が、わしの励みじゃ。

（子規、突然、激しく咳き込み始める。咳が長く続く）

碌堂

子規、大丈夫か！？……もう横になれ！

碧梧桐

（慌てて水を持ってくる）

子規先生、水をどうぞ。落ち着いて飲んでくださいな。

子規

（息を整え、苦しい中で笑みを作る）

大丈夫じゃ。こんな咳、わしの付きもんよ。まだまだ詠みたい句があるけん。

碌堂

強がりばかり言いよって……体は正直なんぞ。

碧梧桐

まあまあ、無理なさらんでも句は逃げませんけん。少し休んでからでも大丈夫ですわ。

子規

おまえら、ほんまに大げさじゃのう。これぐらいで倒れはせん。

碌堂

……それでも、わしらは心配なんじゃ。子規、おまえは一人じゃないぞ。

子規

わかったわかった。大げさな兄ちゃんとおじさんじゃの。まあ、見てくれ。

「夏の夕 蝉声高く 陽のしずく」

（少し間を置き、顔を上げる）

子規

この句には、夏の夕刻の蝉声と、まだ残る日差しきらめきを込めておる。夏の熱気が和らぎつつも、光が滴るように瑞々しい瞬間じゃ。

金之助

なるほど。夕方の涼しさと、夏の名残の熱が同居しておる。おまえの言葉に、移ろう時刻の呼吸が映っておるのう。

子規

病に伏せていても、この自然の移ろいは心の支えじゃ。俳句はその一瞬を切り取ることができる。

碌堂

命の熱と儚さが感じられる。おまえの句は夏そのものじゃな。

碧梧桐

言葉は季節を越えて響きますけん。子規先生の句が、未来に残ることを心から願うとりますわ。

子規

もっと詠みたい。夏の命の輝きを、言葉に刻みたいんじゃ。

金之助

おまえの情熱が、わしらに力を与えておる。

子規

皆、わしの句を聞いてばかりじゃが、たまにはわしが詠んだ“へんてこ句”も聞いてみるかのう。

碌堂

へんてこ句？それは楽しみじゃ。聞かせてみい。

子規

「蚊を追えば 煙まといて 庵苦し」

碧梧桐

そんな句もええですなあ。煙と蚊とがからまり合う光景、よう見えるようすわ。

子規

「蚊とわし どちらが先に 負けるかね」

金之助

（にやりと微笑み）

おまえもなかなかやるのう。病を抱えてなお笑いに変える、その強さは何より尊いことじゃ。

子規

よし、また次も詠んで笑わせてやるけん、覚悟せいよ。

「蚊に刺され かゆみ止めたら 夢にまで」

碧梧桐

「蚊も集い 庵に笑いも 夏の夕」

碌堂

「蚊もおどり 煙くるくる 夏の庭」

子規

そうじゃ、夏は小さな敵も面白い題材じゃ。皆、次はどんな句を詠むんじゃ？

金之助

「夕涼み 煙と蚊追い 書を開く」

子規

さすが金之助、真面目じゃが笑いも忘れとらんう。

碌堂

そうじゃ、夏の夕は詠むも学ぶも尽きんなあ。

金之助

うーん、ちょっと笑いすぎて腹が痛くなってきたわい。

子規

それはええことじゃ。笑う門には福来ると言うしのう。

碌堂

じゃあ、今日はこのくらいにしとこうかの。

碧梧桐

次も元気に集まれるように、しっかり休んどってくださいな。

子規

何じゃ、もう終わりか？まだまだ詠み足りんのに。

金之助

終わりじゃ、終わり。

子規

そ、そうかのう…また次を楽しみにしとるわい。

碌堂

無理せんでのう。次も元気な顔を見せてくれればええ。

碧梧桐

はい、また近いうちに集まりましような。

子規

よし、それまで体を大事にするけんう。

（碌堂、碧梧桐が下手に出て行き、外の扉を閉める音が静かに響く）

子規

（ふと立ち上がり、少し声を荒げて）

なあ、金之助！変な氣を利かせるな！わしが終わりと云うまで、まだまだ詠みたいんじゃないぞ！

金之助

おまえのためじゃ。無理は禁物じゃからな。

子規

（足を踏み鳴らし、怒氣を帯びて）

お前は心配が過ぎるんじゃない！わしの気持ちがわからんのか？

金之助

（食い下がらず、真剣な眼差しで）

わしがわからんとも思うか？ただ、おまえの命が何より大事じゃ。

子規

じゃが、わしはわしじゃ！心配ばかりで困い込まれては詠めんのじゃ！わしは今、この瞬間に生きとる。筆を握ることこそがわしの命なんじゃ！

金之助

わしもわしじゃ。おまえの強さに惹かれ、守りたくなるだけじゃ。

子規

（烈火のごとく声を張り上げる）

守りたくなる？それはわしを弱き者とも思うとるんか？わしは弱くない！病に臥せようが、命の灯が揺れようが、句はまだ生まれるんじゃない！

金之助

弱き者と言うつもりはない。だが、病は確かにおまえを蝕んどる。無理をさせたら、命が持たんかもしれんのじゃ。

子規

（胸を叩きながら）

無理をするのは、わしの勝手じゃ！わしの体は壊れておっても、心は折れとらん！句を詠む力はまだまだ残っとる！それを止める権利は誰にもない！

金之助

（必死に言葉を絞り出す）

管理じゃない。わしはおまえの友じゃ。友ならば、時には止めることも必要じゃろう。

子規

（怒りと悲しみを混せて叫ぶ）

友ならば、わしの言葉も聞け！わしは詠み続けるためにここにおる。病に押し潰されて黙って死ぬつもりなど毛頭ない！句を刻むために、わしは生きとるんじゃない！

金之助

それはわしも望むことじゃ。だが、わしにはただ…おまえが苦しむ姿を見たくないだけじゃ。

子規

（机を叩き、震える声で）

苦しみを知ってこそ、わしの句は生まれるんじゃ！痛みも、血も、絶望も、みな句の糧になる。おまえにそれを奪われるわけにはいかん！わしは苦しみを抱きしめてでも詠む！

金之助

（うつむき、苦悩の色を浮かべて）

…わしは、おまえがどれほど強いかわかっておる。だからこそ、恐れてしまうのじゃ。おまえがその強さゆえに、自らを削り尽くしてしまうのではと。

子規

（深いため息をつき、しかし声は熱を帯びたまま）

金之助…わしは死にたくないんじゃ。ただ生きたいだけじゃない。生きて詠みたいんじゃ！わしが息をしとる間は、句を吐き出さねばならん。詠むことがわしの生きる証じゃ！

金之助

（押し殺した声で）

……子規。

子規

（涙をこらえながらも声を荒げる）

おまえにわしの命を止めることはできん。死が迫ろうとも、句を詠み続ける。それがわしの矜持じゃ！おまえが止めれば止めるほど、わしの心は叫ぶ。黙って死ぬのはごめんじゃ！

（子規、激しく咳き込み始める。喀血し、畳に赤い痕を落とし、苦しげに身をかがめる。それでも必死に声を振り絞る）

子規

（血に染まった口元で）

見よ……これがわしの句の源じゃ……！命を削ってもなお……詠む！わしは……俳人なんじゃ……！

（金之助、慌てて駆け寄り、子規の体を支える）

金之助

（息を呑み、押し殺した声で）

……子規……おまえというやつは……。

子規

（掠れた声で）

命は……捨てん。わしは……使い切るんじゃ……句とともに……！

（子規、力尽きたように金之助の胸に崩れ落ちる。激しい緊張のあと、場は静寂に包まれる。荒い息の音だけが響く。子規はしばらく黙り込み、やがて途切れ途切れに）

子規

……息が……苦しい……。筆をとろうとしても……手が震える……。思うように詠めんのじゃ……。

（金之助、子規を抱き支え、必死に声をかける）

金之助

子規……。

子規

（目を閉じ、言葉を絞り出す）

体が……日に日に弱るのを感じる……。わしが必死に句を求めれば求めるほど……命が削られていくようで……。

金之助

そうか……。だが命あつてのものじゃ。無理をすれば……。

子規

（力なく笑い、うなだれる）

どうして……こんな病になってしまったんじゃろうか……。まだやりたいことが山ほどある……。けれど……灯が少しずつ消えていく……。それが……恐ろしいんじゃ……。

（しばし沈黙、子規は震える手で畳を掴み、涙をにじませながら言葉を溢れさせる）

子規

……わしは……本当は弱いんじゃ……。強うあろうと、皆の前で虚勢を張ってきたが……胸の奥では毎日、恐怖に怯えておる。夜が来るたび、目を閉じれば……もう朝を迎えられんのではと思う。眠るのが怖いんじゃ……。

（嗚咽をこらえつつ）

わしは……死にとうない。死ぬなんて、まだ受け入れられん。まだ詠みたい。まだ笑いたい。まだ……生きていたいんじゃ……。

（声を震わせ）

だが、この体は……日に日に裏切る。咳は止まらず、声は掠れ、呼吸すらままならん。筆を握る手すら思うように動かん。……悔しいんじゃ……！

（金之助を見上げ、涙をこぼす）

おまえらにはわからん……。体が弱るごとに、わしの自由は削がれ、命の灯は

揺らぐ。誰も代わってはいくれない。わし一人が……この孤独を抱えねばならんじゃ……。

（しばし嗚咽。やがて、震える声で続ける）

子規

句を詠むたびに心が壊れていく気がする。わしの血も、苦しみも、すべて紙に吸い込まれていくようで……。吐き出しても吐き出しても、淀んだ想いは尽きん。心の底には虚しさばかりが広がって……。わしはどこへ行くんじやろうか……。

（金之助にすがりつくように）

死ぬのは怖い……。けれど……。このまま生き続けるのも怖い……。わしは……。どうすればええんじや……。？どこへ行けば救われるんじや……。？

（声を震わせ、嗚咽まじりに）

金之助……。わしは弱い。俳人としての誇りがわしを支えてきたが、その影で……。何度も泣き崩れそうになった。寂しくて、苦しくて……。胸が張り裂けそうなんじや……。

（しばし言葉を失い、涙だけが落ちる）

子規

（掠れた声で）

……。ほんとうは、もっと生きたかった。もっと旅をしたかった。もっと……。見たい景色があった。笑い合いたい人があった……。それがみな、遠ざかっていく……。この身から剥ぎ取られていく……。その悔しさと恐怖に……。わしは押し潰されそうなんじや……。

（金之助、強く子規を抱きしめる。子規は子どものように泣きじゃくり、嗚咽だけが響く）

（しばし長い沈黙。金之助は子規の背を静かにさすり続ける。子規の泣き声は次第に小さくなり、やがてかすかな呼吸だけが残る）

（その静けさを破ることなく、舞台奥にお重が姿を現す。二人をしばらく見つめ、ゆっくりと歩み寄る）

お重

（小さな声で）

……。先生……。どうか、もう休まれてくださいまし……。

（金之助、驚いたように顔を上げるが、お重の眼差しに何も言えず、ただ黙って子規を支える）

（お重、二人の傍らに膝をつき、そっと子規の肩に手を添える。その姿に舞台は静かな温もりに包まれる）

（やがて照明が徐々に落ちていき——暗転）

（窓の外の蝉の声が、いつしか秋の虫の音に変わっていく。碌堂と碧梧桐が居間に座っている）

碌堂

もう九月か。月日の経つのは早いとう。

碧梧桐

涼しい風が心地よい季節になりましたなあ。今日は句会が楽しみですね。

（碌堂と碧梧桐が座り、静かに句会の準備を始める。居間の窓からは秋の涼しい風がそよぎ、虫の声が静かに響く）

碌堂

秋風が心地よい。こうして静かな時を過ごせるのはありがたいことじゃ。

碧梧桐

何度か集まってきましたけど……やっぱり句会は心が落ち着きますなあ。子規さんも、少しでも気分が楽になるとええんですが。

碌堂

体調は心配じゃが、顔を見せてくれるだけで皆が安心する。句会は皆の心の薬じゃからのう。

碧梧桐

そうですねあ……言葉を交わすことで、子規さんのお力になれば嬉しいですね。

金之助

皆の顔を見ると、やはり落ち着くのう。

碌堂

ああ、夏目先生。お疲れ様じゃ。子規の様子も気になるところじゃ。

碧梧桐

先生、お疲れさまです。句会も始まりますので、どうぞお座りくださいな。

金之助

（軽く頭を下げて）

ありがとう。子規の体調はまだ心配じゃが、こうして集まれるのはありがたいことじゃ。今はちよっと外へ出ておるが、またすぐ戻ってくるじゃろう。

碌堂

そうか、少し気分転換に出ておるのかのう。無理せんようお願いしたいものじゃ。

碧梧桐

みんな待っとる間に、気持ちを落ち着けて句会の準備をいたしましょう。

金之助

皆に改めて伝えておきたい。子規は体調の悪化で、療養環境を求めて東京へ戻ることになった。

碌堂

うむ、先に話は聞いておった。松山の療養では限界があると本人も覚悟しとるようじゃな。

碧梧桐

東京には、もっと整った医療があると聞きますけん。子規さんにとって、そちらの方がええのかもしれませんが。

金之助

わしも子規から直接聞いた。本人の強い意志じゃ。わしらは見守るしかないが、できる限りの支えを尽くそう。残念ではあるが、家族のもとで看護を受け、少しでも静養できることを願うばかりじゃ。

碌堂

句はまた聴けるはずじゃ。まずは体が何よりじゃからな。

碧梧桐

元気なお姿で、また松山に戻ってこられる日を、みんなで心待ちにしますわ。

（子規、手に梨を入れた小籠を持って、元気そうに下手から居間に入ってくる）

子規

おう、皆！近くの畑で採れた梨じゃ。みずみずしくて、しゃりっとしてうまいぞ！

碌堂

おお、それはありがたいのう。元気そうで何よりじゃ。

碧梧桐

秋の味覚は、ほんまに心を和ませますなあ。

金之助

無理はせんようにな。でも、おまえがこうして皆の前で笑っておるのが何よりじゃ。

子規

まだまだ詠み足りん。元気におるけん安心せえ。

（子規が小籠を置き、席に座ろうとするが、少し咳き込む。皆が心配そうに見守る）

碌堂

子規、おまえの体調はどうじゃ？無理はせんとよいが…

子規

（咳を抑えつつ毅然と）

体は確かに弱うなっとなるかもしれないが、詠む気持ちは衰えん。東京に戻るのも、療養しながら俳句を続けるためじゃ。

碧梧桐

そのお気持ちは何より大事ですわ。どうか無理せず、しっかり養生してください。

金之助

おまえの意志を聞いて安心した。わしらも支える。必ずまた元気な姿を見せてくれ。

碌堂

そうじゃな。ここはしばらく離れるが、気持ちはいつも一緒じゃ。

金之助

日々ともにおるがゆえに、改めて離れることの寂しさを感じる。だが、また松山に戻る日を楽しみに待っとるぞ。

（お重がお盆に茶碗を載せてゆっくりと現れる。表情は落ち着いていて、いつものように丁寧に振る舞う）

お重

（穏やかに）

お茶をお持ちしました。どうぞお疲れになられませんかように。

（お重はお盆を卓に置き、礼儀正しく頭を下げる）

碌堂

いつもすまんなあ、お重さん。おかげで助かっとなるよ。

お重

いえいえ、そんなことはございません。皆さまの笑顔がわたしの励みでございます。

碧梧桐

お重さんのおかげで、気持ちよう句会ができますわ。ほんまにありがとうございます。

金之助

ほんに、お重さんには感謝しとる。いつもありがとう。

碌堂

今日は…子規を入れた最後の句会になるじゃろうのう。

碧梧桐

そうですなあ……子規さんは東京に戻られますけど、その志を胸に、わしらも前を向いて進んでいきたいと思えますわ。

金之助

子規が遺すものは大きい…わしら、その火を消さずに繋いでいく責任がある。

お重

（静かにうなずき、茶碗の位置を整えながら耳を傾ける）

碌堂

これからの俳句、詩…そして文学全般が、どう変わっていくのか。皆で考え、歩んでいきたいと思うんじゃ。

碧梧桐

はい。新しい時代の風を受け止めながら、伝統と革新の両方を大切にしていきたいと思いますわ。

金之助

それこそ、子規の思い描いた文学の未来じゃな。

子規

（ゲホツ…と咳をこらえ、口元に手拭いを当てながらも、わずかに微笑んで）皆の話を聞いて…心強く思う。わしの願いはただ一つ——言葉が時代を照らし続けることじゃ。

碌堂

そうじゃ。子規の精神は、ここに根づいておる。わしら、しっかり守り、未来へと繋いでいかねばならん。

碧梧桐

これからの文学は、変化の激しい世の中にあっても、心に届くものでありたいと思いますわ。子規さんの志を胸に、わしも精一杯努力してまいりますけん。

金之助

わしらは皆、それぞれの立場で言葉を紡ぐ。時には試練もあるじゃろうが…共に支え合い、学び合うことで、きっと乗り越えていけるはずじゃ。

子規

わしは遠くに行くが…心はいつも皆と共にある。どうか、どうか——これから、それぞれの道で輝いてくれ。

お重

（やさしく微笑み）

皆さまの言葉が未来の灯火となり、心を温め続けますように。

碌堂

よし、それではそろそろ句会を始めようか。子規もここにおける最後の句会、心を込めて詠もう。

碧梧桐

はい……言葉は生きとし生けるものの証やと感じます。しっかり胸に刻ませて

もらいますわ。

金之助

（静かにうなずき、机の上の筆を手に取り）
さあ、始めるとしようか。

（子規、軽く咳を抑えながらも筆を手に取り、一句を思い浮かべる）

子規

（小さく呟くように）

「秋風に 色づく葉こそ 声ひびく」

碌堂

（微笑みながら頷き）

うむ、心に染み入るのう。

碧梧桐

（静かに筆を取り、墨をすりながら）

季節の移ろいを感じる一句ですなあ。心が洗われるようですわ。

金之助

（筆を手に、ゆっくりと墨を置く）

「この風に 思ひ重ねて 過ぐる日よ…」

お重

（そっと茶碗を整えながら、静かに見守る）

子規

（咳を抑えつつ、笑みを浮かべながら筆を取り）

「日短し 思つままに 言の葉よ」

碌堂

（にっこり笑い、頷きながら）

おお、よい心じゃのう。日々の思いが静かに伝わってくる。

金之助

（静かに筆を休め、深呼吸をして）

皆の句に、季節と希望が溶け込んでおる。こうして共に詠むひとときこそ、文学の醍醐味じゃな。

お重

（茶碗をそっと卓に戻しながら、微笑みを絶やさず）

皆さまの思いが、言葉となり、心を満たしていく様子が見えております。

【幕】